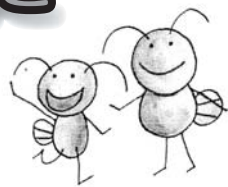


「にっぴー」とともに

県立松橋西養護学校を訪問して



同校のマスコット
「にっぴー」

10月6日、町教育委員会7人で訪問する。校長自ら玄関まで出迎えていただき、温かな雰囲気を感しながら、まず校舎内を見学させていただく。
11月8日開催予定の「まつにし祭り」に向けての、作品づくりに懸命な教室が多かった。

小中高一貫した 支援体制を構築

小学部37人、中学部25人、高等部54人が、県内15町村から通学していて、スクールバス利用と自立通学（高等部）に分かれています。益城町からも6人が通学していますが、もしスクールバスを益城町まで延ばしてもらえらるなら、希望者が増えるのでは、



作業学習での作品の説明を聞く

と思ったことです。

昭和52年（1977年）、知的障がい児のための養護学校として開校。心豊かでたくましい、社会を生き抜く児童生徒の育成をめざして日々、実践を積み重ねておられます。

特に本年度は、「つなぎ」をキーワードに小中高一貫した支援体制を構築し、一体感をめざしているというお話でした。

小学部は、生活単元学習を

中心に、テーマのある生活を毎日繰り返し、子どもたちのやりたい気持ちを高め、主体的に活動する姿を目指しています。

中学部は、生活単元学習、作

業学習を中心に、

生徒がテーマに沿って自らの活動に主体的に取り組む姿を目指しています。

高等部は、作

業学習を中心に、社会自立に向け、自らの目標に向かって主体的に取り組む姿を目指しています。

より専門性が 期待される教職員

教職員は69人で、普通学級に比べて恵まれているようにみえますが、自閉症の子どもが年々多くなりつつある現在、より専門性が期待されていて、「子どもの不幸に敏感」な教師、保護者や地域のニーズに対応できる教師を目指して精進しているということでした。



キックベースボールを楽しむ高等部の生徒

益城町の小中学校にも、同校の先生が特別支援教育コーディネーターとして指導にいられていて、連携をありがたく思っています。

町内にも、40人を超える支援の必要な児童生徒がいるのを思う時、各学校の特別支援教育支援員を中心とした努力はもちろんのこと、特別支援センターとしての養護学校との「つなぎ」をさらに深める必要性を強く感じながら、マスコットの「にっぴー」君の笑顔に別れを告げました。

（文責 教育委員長 坂田敏昭）